

2011年度活動報告

TOOTH トウス フェアリー FAIRY



ご寄付いただいた歯科撤去金属が
ミャンマーの子どもたちの学校に生まれ変わりました。



ABOUT PROJECT

歯の妖精

TOOTH FAIRYプロジェクト

西洋では抜けた乳歯を枕元に置いて寝ると夜中に歯の妖精TOOTH FAIRYがこっそりその歯をもらいに来て、お礼にプレゼントと交換していくと言われています。

TOOTH FAIRYプロジェクトは、役目を終えた歯科金属を困難に直面している子どもたちのために活用するプロジェクトです。

歯科金属には、金や銀、パラジウムと言った貴金属が含まれており、

それを全国の歯科医師と患者様の協力により集め、リサイクルし、子どもたちの支援に役立てます。

2011年度のプロジェクト報告をぜひお読みください。

そしてあなたもぜひ子どもたちに笑顔を届ける「歯の妖精」になってください。



CONTENTS

目次

タイムライン	02
ミャンマー学校建設プロジェクトルポ	03 - 06
日本初の子どものホスピス設立を目指す「海のみえる森」から声が届きました	07 - 08
チャイルド・ケモ・ハウス インタビュー	09 - 12
TOOTH FAIRYと被災地支援	13
TOOTH FAIRYへの声	14
メディア掲載実績&プレゼン・ブース展示等一覧	15
数字で見るTOOTH FAIRY	16
TOOTH FAIRYプロジェクトからのご挨拶	17
日本財団の寄付プロジェクトご紹介／TOOTH FAIRYの流れ	18

タイムライン TIMELINE

寄付関連のニュース

2009年

06月 TOOTH FAIRYプロジェクトスタート

11月 第1回金属換金(金額:12,923,375円)

2010年

02月 第2回金属換金(金額:28,002,037円)

07月 第3回金属換金(金額:24,804,508円)

11月 第4回金属換金(金額:32,246,616円)

2011年

01月 第5回金属換金(金額:67,561,424円)

02月 株式会社 ライオン様よりミャンマーの子どもたちに歯ブラシ・ペースト寄付



(左)海のみえる森 チャリティコンサートの様子

(右)チャイルド・ケモ・ハウスでテスト販売したアニマルマスク

09月 第6回金属換金(金額:59,502,406円)

10月 第64回九州歯科医学大会にて TOOTH FAIRYのブース出展

11月 第7回金属換金(金額:31,493,132円)

12月 金属回収強化月間

2012年

01月 第8回金属換金(金額:69,615,398円)

02月 株式会社 サンスター様よりミャンマーの子どもたちに歯ブラシの寄付

プロジェクトのニュース



TOOTH FAIRYに届いた
歯科撤去金属



第64回九州歯科医学大会
TOOTH FAIRYのブース出展の様子

12月 ミャンマー学校建設10校完成

02月 小児難病支援プロジェクト
海のみえる森、チャイルド・ケモ・ハウス 始動

05月 歯へ届けるプロジェクト始動 岩手⇒宮城⇒福島へ

05月 被災地の参加歯科医院にお見舞いキット送付

06月 チャイルド・ケモ・ハウス キックオフイベント

08月 海のみえる森 体験宿泊会スタート

08月 日本歯科医師会、神奈川県歯科医師会 海のみえる森 訪問

08月 一般財団法人チャイルド・ケモ・サポート基金が公益認定

10月 海のみえる森 秋の芸術祭

12月 チャイルド・ケモ・ハウス アニマルマスクテスト販売

03月 海のみえる森 チャリティコンサート

03月 ミャンマー・シャン州(学校建設地)訪問

03月 チャイルド・ケモ・ハウス 建設地が神戸市に決定



REPORT PAGE

2012年3月8日～12日の滞在中に訪問したロンカン準中学校*の様子をレポート

ミャンマー学校建設プロジェクトルポ

民主化で世界の注目が集まるミャンマー。
TOOTH FAIRYプロジェクトでは、支援事業の第一弾として2010年度、ミャンマー・シャン州に10校の学校を建設した。現在は、日本財団が現地に立ち上げたNGOセダナーとともに、村による自立的な運営に向け支援を続けている。

2012年3月、日本歯科医師会を代表し、熊本県歯科医師会の浦田会長と埼玉県歯科医師会の小谷田副会長がミャンマーを訪ねた。

※準中学校…ミャンマー・辺境地域は、小学校までしかない村がほとんどです。校舎の建設により、小学校が1～3年延長し、中学校の役割をする学校のことをいいます。



【プロジェクトパートナー】
セダナー（ミャンマー）
2010年度支出／24,771,000円



歯の妖精TOOTH FAIRYプロジェクトが学校建設を行っているのは、少数民族が多数居住する辺境地域のシャン州です。

REPORT 01 ロンカン準中学校を訪問



車で、ボートで奥地へ進む

3月にも関わらず、雨季前のヤンゴンはずで30℃を超えていた。TOOTH FAIRYで建てた学校は、そのヤンゴンから飛行機で北に1時間のシャン州に全てある。今回訪問した三校の内の一つ、ロンカン準中学校は、州都タウンジーからバスで未舗装の道を2時間半揺られ、さらにボートに乗り換えて、1時間ほどインレー湖を下ったところにある。

村民からの温かい歓迎を受ける



水道はなく、電気も村に二つの発電機があるのみという貧しい村。学校は全校生徒316人で、訪問時は春休みにもかかわらず生徒や教師、村民ら約200人が集まり歓迎式典を開いてくれた。ミャンマーは130を超す民族が住む多民族国家。この地域にはシャン族、パオ族、インダー族が住み、主に農業と川漁で生計をたてている。式典では、仏教国家らしく、地域で一番尊敬されているお坊さんと女性校長が支援に対する感謝を述べ、カラフルな民族衣装をまとったシャン族、パオ族の子どもたちが伝統舞踊を披露してくれた。日本側からは、歯ブラシや歯磨き粉、そしてサッカーボールやけん玉といったおもちゃなどが贈られた。子どもたちは式が終わると一目散に外に飛び出して遊び始めた。



パオ族
女性は龍、男性はゾーギー（魔術師）に見立てたタオルを巻く。



シャン族
ビルマ族について2番目に多い民族。はちまきのようなものを巻く。



インダー族
インレー湖の上で暮らす。浮島で農業を行っている。

PROBLEM
高等教育が受けられない

貧困を解決し、生活の質を向上させるには、高等教育を受けた人材が必要だ。しかし、ミャンマーの地方部では、校舎の不足などにより、中学校、高校の設立が認められないケースが多い。

SOLUTION
建てて終わりじゃない学校建設

TOOTH FAIRYでは、山岳地帯のシャン州に学校を建設している。学校が増えることで、子どもたちは高等教育を受けることができる。1校あたり約300万円が支援され、中には小規模発電や金融といったコミュニティビジネスを立ち上げる資金が含まれている。コミュニティビジネスにより、地域による自主的で持続的な学校運営を目指す。一部の先生の給料もその利益から支払われている。



青空の下で子供たちの歯の健康をチェック

思った以上ではないが、乳歯だと平均2～4本のむし歯がある。ただ治療に行けないと思うので歯がゆい思いはある（小谷田副会長）



歯磨きはきちんとできていない印象。なかなか歯科医院に行ける状況ではない中では、予防をするしかない（浦田会長）



ミャンマー訪問期間中、シャン州のタウンジー歯科医師会やヤンゴン歯科大のミョー・ウィン学長と懇談したほかヤンゴン市内の歯科医院2軒も訪問した。庶民向けの歯科医院では、1日の患者数が1ケタなことも。地方では、専業より、兼業の先生の方が多い状況だ。ただ「設備の違いはあるにせよ、歯科医療に対する考え方などは、どの先生もしっかりしていた」(小谷田副会長)という。TOOTH FAIRYプロジェクトについては、日本の歯科医師のアイディア力・行

動性に驚かれ、感謝の言葉があり、医療的な協力は惜しまない、といった声が聞かれた。学校での子どもたちの様子に心を痛めた両氏は、タウンジー歯科医師会に協力を要請。財政的なバックアップがあれば、こうした地域に巡回診療に回ることも可能との答えを得ることができた。また、ミャンマー側からは「人材面でもっと日本と交流を」と要望があり、今後ともお互いにコミュニケーションをとることで一致した。



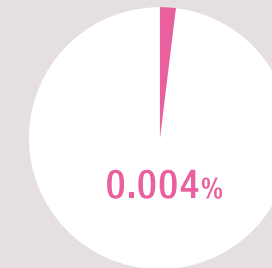
車がパンクし立ち往生していた時に招き入れてくれたバオ族の家族。木と竹を組んだ素朴な家だった。



村は電気・ガス・水道はなく生活は貧しいが、心はとても豊かだ。

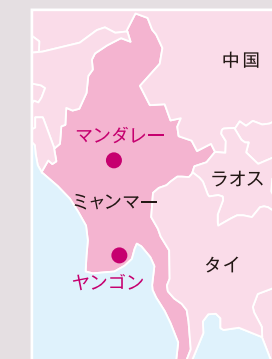
MYANMA COLUMN

歯科医師の割合



ミャンマーは人口約6000万人に対して、歯科医師の数は約2500人しかいない。日本が人口約1億3000万人に対して、歯科医師の数が約10万人であることから、その少なさが分かる。

国内の歯科事情



国内の歯科大学はマンダレーとヤンゴンの2か所にあり、年間の卒業生は300名ほど。国民の口腔ケアへの意識は低く、経済的な事情からも、歯科へかかることは一般的でない。また、歯科医院は都市部に集中しており、今回訪れたような地域で、歯科治療を受けることはまず難しい。



TOOTH FAIRYを通じての社会貢献に携われる意義を強く感じました。

熊本県歯科医師会 会長 浦田健二

初めてのミャンマー訪問でしたが、実際行ってみると、とにかく人が素晴らしい国だなと思いました。人間性というのが素晴らしく純粋な人達が多いな、というのが感想です。古きよき日本を思い出させ、日本が失くしてしまいつつある家族の姿とか、そういうものを大切にしているという意味では、経済的には貧しくとも大変豊かな国だなと思い、日本が支援させてもらうだけでなく、ミャンマーから学ばせてもらうところもたくさんあると思います。TOOTH FAIRYでは、10校の学校を造りましたが、最初はこの費用(1校あたり300万円弱)でできるのか、という不安もありました。今回行ってみると、建てた後の学校運営を現地NGOのセダナーが指導して、地域で自主的に運営できるシステムを作っていて、大切なことだなと思いました。ミャンマーの広

大な土地を考えると今後もまだまだ続けていく意義があると思います。また現地の歯科医師の先生に学校に巡回診療に行ってもらって、歯科の治療が広がっていくとより素晴らしい事業になるでしょう。ミャンマーの歯科医がこの事業に関われるということで、日本歯科医師会に関わる意義が広がると思います。私が実際にミャンマーに行って体験をして肌で感じてきたことは、日本の歯科医師の先生方にもどんどんお伝えしていかなければならない。TOOTH FAIRY参加歯科医師が1万人を突破するような、そういう拡大を期待したいし、我々の責任だと感じました。我々は、自分たちがやっている歯科診療自体が社会貢献だと自負していますが、TOOTH FAIRYを通じての社会貢献に携われる意義を強く感じました。



家族の寄り添う姿は忘れかけた昔の日本を思い起こさせてくれました。

埼玉県歯科医師会 副会長 小谷田宏

ミャンマーに行く前にもっていたイメージと実際は明らかに違いました。衛生面の問題も含め不安でしたが、杞憂だと分かりました。やはり現地に来てみないと分かりませんね。ロンカン準中学校へ行く道中、悪路で車がパンクしました。そのおかげで、3世代同居のバオ族の家族と巡りあい、見ず知らずの外国人の私たちが家の中に招き入れてくれて、素敵に触れ合いができたんですよ。木と竹を組んだだけの素朴で小さな家でしたが、清潔に整頓され、仏様も先祖も祭ってある。家族が寄り添う姿が日本の昔のイメージを思い起こさせてくれました。パンク様々学校では青空の下、歯のチェック、歯みがき指導もしまし

た。ほとんど治療経験がない子どもばかりで、たくさんむし歯が見られ、特に乳臼歯が多く、平均して2本から4本のむし歯がありました。ただ、治療を受けていないこともあるし、口腔のヘルスケアという考え方そのものが根付いていないのでやむを得ないですね。考えてみれば30年から50年前の日本は、同じような状態で、子どもたちはむし歯だらけだったわけですから。ヘルスケア思想が根付くには時間がかかるけど、そうなれば大幅に改善されるだろうと期待できます。滞在中、現地の歯科医師とお話しさせていただく機会がありましたが、志が高く、自己研鑽への考え方もしっかりしていました。皆さん、むし歯治療だけでなく、最新の歯周病治療やインプラントの研修も受けたいようですが、手段がないという悩みを抱えています。日本歯科医師会も研修など多角的に支援できればいいですね。

日本初の子どものホスピス設立を目指す 「海のみえる森」から声が届きました

TOOTH FAIRYが設立を支援している日本初の子どものホスピス「海のみえる森」。「海のみえる森」の良さについて、関係者の方にそれぞれの立場から語っていただきました。



子どものホスピスとは
難病や重い障害と闘う子どもたちと、その家族や兄弟を受け入れ、レスパイト(休息)を提供するほか、心理的・社会的問題の相談・支援、死別後のビリーブメントケア(遺族の心のサポート)を行う施設です。「海のみえる森」では、現在、体験宿泊会を行うなど、開設に向けて着実に歩んでいます。

「ひとりじゃないよ」というメッセージを発信したい

一般財団法人 海のみえる森 事務局長
甲斐裕美さん

「海のみえる森」は緑豊かな森や輝く海を眺めながら、病気や障害と闘う子どもたちとご家族が、心と体をほっと休めるための場所です。私自身、小さな子どもが三人おりますが、子育てには気持ちと体がついていかず、辛くなる時があります。そんな時に、「ちょっと見てあげてから休んで」といってくれた人のありがたさは忘れられません。「海のみえる森」には「助け合い」の気持ちを持ったスタッフやボランティアがたくさんいます。休みなく頑張っている子どもたちやご家族へ「ひとりじゃないよ」というメッセージを発信していきたいと思っています。

バリアフリーのツリーハウス制作

ツリーハウスクリエーター
小林崇さん

今から4年ほど前、大磯の森に日本では初めての小児ホスピスを誘致したい、そして難病や重い障害と闘っている子どもたちのためにバリアフリーのツリーハウスを制作してほしいという依頼がありました。なんて素敵なお話だろう!不自由な生活を強いられている子どもたちがツリーハウスの上から車椅子に乗ったまま大磯の山や木々、そして海をキラキラした眼で見ているイメージが僕の目の前に浮かび上がってきました。小児ホスピスに対する知識はありませんでしたが、ツリーハウスというツールを通して人と自然の関わり方、難しいことは考えなくて楽しく遊ぶ!ということを伝えていきたいと思っています。

訪れた時よりも元気になる場所

あおぞら診療所新松戸 医師
前田浩利さん

自分の患者さんに同行して行かせていただいた「海のみえる森」。忘れることのできない体験になりました。「海のみえる森」の名の通り、豊かな緑の木々の合間に見える美しい海を見ていると、森のエネルギーが自然に流れ込んできて、心と体が癒されていくのを感じることができました。それは、子どもたちやご家族も同じようで、訪れた時よりも元気になる帰っていかれます。何よりの癒しは、ボランティア、スタッフの皆さまの愛情のこもったおもてなしです。人を癒すのは「人」。そのことを改めて実感させてもらいました。

日常と違う時間を過ごせる場所

ゲスト父
水澤実さん

理子(9歳)は進行性の難病。本人の闘病と家族による介護生活はもうすぐ8年目になります。家族そろって出かけるのが一家の楽しみでしたが、2年ほど前から人工呼吸器を使うようになり、外出の機会は激減し、家族で泊りの旅行をするなどは叶わない願ひになっていました。今回、念願の泊りでの旅行ができ、特に夫婦二人で市街地散策をできたのが思い出深いものでした。心優しいスタッフやボランティアの皆さんが、愛情を注いで理子をケアしてくれているという安心感があるからこそ、家族が心からリラックスできたのだと思います。また明日から頑張ろうという活力が沸きました。「海のみえる森」が、たくさん子どもたちと家族に笑顔を与えてくれることを願っています。

ふだんできない家族旅行ができた

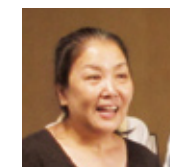
ゲスト兄
水澤優斗くん

妹の理子が難病と闘っています。ぼくが、「海のみえる森」でよかったと思ったことは、ふだんできない家族での旅行ができたことです。妹もすごくおだやかな表情をしていて、リラックスしているんだなと思いました。他にも、ピザがまだピザを焼いたり、流しそうめんをしたり、地引網をしたり、星座を見たりと、ふだんなかなかできない体験ができてとてもおもしろかったです。めずらしいアオバトを見たので、夏休みの自由研究にしました。このような体験をさせてくれたスタッフの人たちに感謝しています。ぼくはまた「海のみえる森」に、妹と行きたいです。

故郷になった「海のみえる森」

ゲスト母
田嶋早苗さん

娘・華子が旅立ってから1年5ヶ月になります。姿はなくても華子は森を自由に散策したりツリーハウスに登って遊んだりしていますね。それからあなたはアリエルでもあるから大磯の海で優雅に泳いでいるでしょう。「海のみえる森」では、家族でゆっくりしたいという希望を叶えていただきました。主治医の先生とスタッフの方々に支えていただきながら最後の家族旅行で楽しく穏やかに過ごさせていただきました。私にとって「海のみえる森」は娘と過ごした忘れ得ぬ大切なところになっています。華子の魂は森に海にきっと永遠生きつづいてくれ、これからも訪れるゲストを元気にしてくれると信じています。



チャイルド・ケモ・ハウス インタビュー

TOOTH FAIRYが設立を支援している日本初の小児がん専門治療施設「チャイルド・ケモ・ハウス(仮称)」が、いよいよ2012年5月18日に着工しました。そこで改めて、小児がんでお子さんを亡くされた経験を持ち、またスタッフとして日々奔走する田村亜希子さん、萩原雅美さんに、小児がん患児とその家族がどのような状況に置かれているのか、「チャイルド・ケモ・ハウス(仮称)」が目指すことについてお話をお聞きしました。



【プロジェクトパートナー】
公益財団法人チャイルド・ケモ・サポート基金

話し手／田村 亜希子さん (NPO法人チャイルド・ケモ・ハウス 事務局長)、萩原 雅美さん (公益財団法人チャイルド・ケモ・サポート基金 事務局長)
聞き手／田代 純一 (日本財団 ファンドレイジングチーム)

闘病生活を送っている間は 毎日をこなすのに精いっぱい

—— 本日はよろしくお願ひします。まず初めに、お二人がこの活動に携われた経緯、個人的な体験をお聞かせいただければと思います。

萩原 私の子どもは年子の姉妹で、下の子が10カ月のときに急性リンパ性白血病という病気になりました。お姉ちゃんは2歳になる前です。その診断のつづいた日から急に、普段の日常生活から闘病生活にガラッと変わりました。お姉ちゃんは実家に預けて、私は下の子と共に24時間付き添いの入院生活に入るようになりました。その診断のときに一番思ったのが、まず現実を受け止めきれないんですね。市民病院で診断していただいたのですが、おそらく、先生もあまり普段見慣れている病気ではないんですね。ですので、検査結果を持ってくる手がぶるぶる震えていたり、診断の説明をされるときに明らかに先生自身も動揺しているのがよくわかりました。

その後大学病院に移り、治療に入ってから、もう本当にトントントンと状態が良くなって、臍帯血(さいたいけつ)を使って移植するということが最終目標にしました。それがうまくいって、喜んで退院したん

ですけど、そのあと1カ月半ぐらいしたら、すぐに再発してしまって病院に戻ってきました。最初から数えたら2年弱ほどの入院生活です。ずっと24時間付き添いの生活をおくりました。その間、お姉ちゃんはずっと何も理由が分からないまま。小さな子どもに「妹がこんな病気で」と言っても分からないですし、私もその説明をするスキルも持っていません。そこをサポートしてくれる人も当時は周りにいなかった。家族それぞれがすごく不安な思いの中、2年弱の闘病生活をしました。

最後に10%成功するかどうかという移植に挑んだんですけど、やっぱり思わしくなくて、2歳半で天国に行っちゃいました。

—— その期間に感じられたことが今の活動に結びついているのでしょうか。

田村 闘病生活を送っている間は、とにかく毎日をこなすのに精いっぱいでした。不満とかを考える余裕というのが本当に一切なくて。家族がバラバラだけれども、それは病気になっちゃったんだからしょうがないとか。

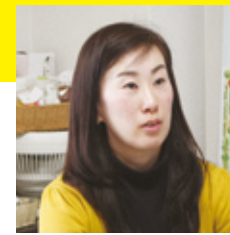
でも2年弱の闘病生活を終えて振り返ったときに、いろいろな思いが沸々とわき上がってきました。もし家族と一緒に過ごせていたら生活上の様々な問題は起きなかったんじゃないかと、そういうことに目が向いてきたんですね。

そんな時に当時の娘の主治医であった楠木先生(NPO法人チャイルド・ケモ・ハウス前理事長)と自分の気持ちについて話をする機会をいただきました。そのときに一番思ったのは、患者だからこんな辛いポジションに置かれているんだと思っていたんですけど、医療者側も、患者を思ったようにケアできないであるとか、**お医者さん自身の生活もすごく忙しい中で、ご飯も食べられない、おうちにも帰れないという状況で生活されていて、お医者さんのにもすごくストレスフルな毎日を送っているということがわかりました。**

どこをどうすればこの問題が解決するのだろうか、一緒に医療者の生活の質と患者の生活の質を上げて、日常生活をあきらめないで、病気以外のところで苦勞しないようにするにはどうしていったらいいんだろうというのを、みんなで考える時間が始まりました。

家族と一緒に暮らしながら 闘病生活を送れる環境を まずつくりたい

—— この活動で一番大切にしたいことはなんですか。



萩原 雅美さん

1974年、兵庫県生まれ。2004年、次女(当時2歳半)を乳児白血病で亡くす。小児血液・腫瘍分野における人材育成と患児のQOLに関する研究会の立ち上げに加わった後、NPO法人チャイルド・ケモ・ハウスの設立に加わる。2011年より公益財団法人チャイルド・ケモ・サポート基金事務局長。

萩原 私たちは、「家族と一緒に暮らしながら闘病生活を送れる」という環境をまずつくりたいです。様々な問題を、実は一遍にクリアしてしまうほど、コアな部分だと思っています。お姉ちゃんが、面会に来てても週に1回何時間か会えるか会えないかだったので、帰るときにやっぱりすごく泣くんですね。自分だけお母さんと引き離されて。そのときに、もう本当に身を割かれる思いで、そこが一番苦しかったので、**やっぱり姉妹とも自分の身近に置いてあげて、ちゃんとしっかり説明して、気持ちのフォローも一緒にいたらしてあげられたのにな、**というところがあります。妹が亡くなったときに、お姉ちゃんはいろんなことが突然、後追いで追いついてくるので、最終的に葬儀の場面を突き付けられて、いろんな現実を見せられて、その翌日からちょっと様子がおかしくなっちゃって、心身症だろうということを言われました。ちょっと私がお買い物に行く間に、「お留守番してね」と言うと、急に高熱が出て吐いてしまったり、という症状が1年弱続いたんです。ちっちゃい体で抱えきれないストレスを持っていたんでしょう。お姉ちゃんは、面会で連れて帰られるときに、最初は泣いていたんですよ、「嫌だ、嫌だ、帰るの嫌だ」って。でもだんだん無理を言わなくなってくるんですね。「ママも頑張ってるね、私も頑張るからね」とか言って。子ども自身の中で頑張ってしまう、それが積み重なって、最終的にお姉ちゃんがしんどい思いをしちゃったんだろうなというのを、今になって振り返ると思います。

—— そのとき、お父さんはどのような状況だったのでしょうか？



田村 亜希子さん

1973年、大阪府生まれ。2002年、長男が神経芽細胞腫(小児がんの一種)と診断され、小児血液・腫瘍分野における人材育成と患児のQOLに関する研究会の立ち上げに関わり、NPO法人チャイルド・ケモ・ハウスの設立に加わる。2007年9月に長男の病気が再発し、享年8歳で亡くなる。現在、同法人事務局長。

萩原 父母に預けてはいるけども、やっぱり上の子のケアに行ったり、病院に荷物を届けたり、下の子の顔を見に来たり。仕事に行ったら普通の社会生活が待っていて、家に帰ったらまた複雑な環境があつてという。その行ったり来たりの間は、本当にストレスがあつたと思います。

—— 私が色々なご家族の方から話を聞いて感じるのは、何か特別なことを求めているわけではなく、当たり前の方ができなくて、当たり前のことをしたいだけ、ということです。今思い返して入院中に一番できなかったことなんでしょうか。

萩原 日常的なことという、病院の中での複雑な共同生活の環境では、鼻歌一つ歌えない。まず靴を脱ぐ環境がないんですね。日常の多くの人が無意識でしている行動をすごく意識的にしたり、また、してはいけないことになってしまったり。そういうものを一つ一つ積み重ねたら、数え切れない量になると思います。**田村** 病室では付き添いは会議室にあるようなパイプイスで、ずっと座っているんですね。簡易ベッドを出してコロんってなって、くつろいでいると、逆になんかだらしないう感じになってしまったり。家だと普通にソファでだらんとしていることもあるじゃないですか。でも、そうしているとだらしないう感じになってしまったり。ベッドはしまっちゃってパイプイスという感じになってしまったり。

—— なるほど。やっぱり家じゃなくて、室内だけど「外」なんですね。

田村 外。そうですね、常に外。

萩原 気軽にできないお話ってあります

よね。カーテン一枚で別の他人が住んでいるわけなので。みんな仲がいいのは仲がいいんですけど、**病室ではやっぱり本当にしんどいときにしたい話とか、涙を流してしまうようなことというのは、もう必死になってこらえないといけないうちが毎日が続いて。**それがだんだん麻痺してきて、当たり前になって、我慢できるようになってくるんですね。

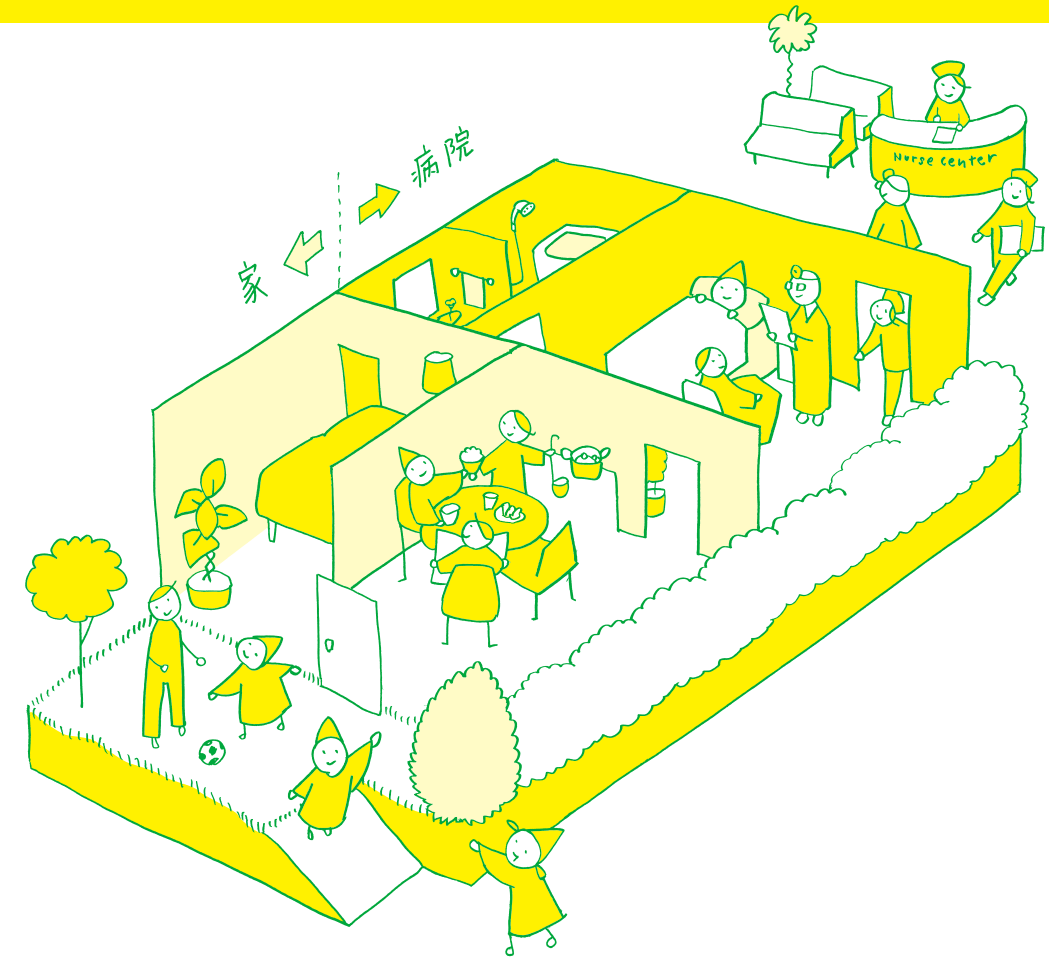
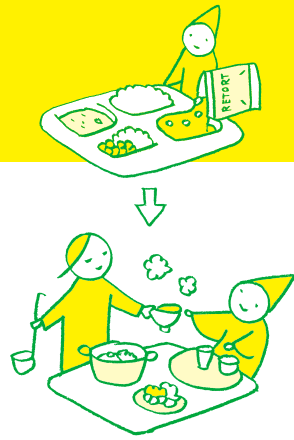
その子の発達年齢に 応じたケアをしたい

—— それでは、田村さんにもお話しをお伺ひします。

田村 息子が2歳半ぐらいのときに、私は何か活動を始めようという感じで、実は病気の子どもというのに目がいていたんですね。

それから間もなく、息子が2歳9カ月で発病したんです。いきなり自分の子どもが小児がんと言われて、すごく自分自身恥ずかしいんですけど、「まさか自分の子が」みたいな感じで。すごくショックを受けて。

「お母さんが笑っていないと子どもは笑わない」と、最近私たちの活動の中でよく言うんですけど、自分の子どもが小児がんと言われて、痛い治療をいっぱいされてところどころでは、私は笑えなかったんですよ。看護師さんと一緒に抑え付けて検査を受けさせたり、とにかく治すための治療をきっちり受けてほしかったり、治すために薬をきちんと飲んでほしいから、「助けて」という気持ちだけで、子どもの気持ちに目がいかないんですね。



突然入院して、子どもは何が一番不安かという、もちろん病院という中で環境が変わったり、白衣がすごく怖かったりということもあるんですけど、ずっと笑って遊んでくれていたお母さんお父さんとか、おじいちゃんおばあちゃんが、すごく悲愴な顔をして、泣きながら自分のことを見ているというのが、恐らく2歳の子どもでも何か感じるものがあったんだと思うんですね。

うちの息子はすごくおしゃべりだったんですけど、しばらく、しゃべらなくなってしまって。声を出せなくなってしまって。それでも、私自身は原因は、すべてその小児がんという病気のせいにあると思っていたんですね。

ただ保育士経験のある方に相談してみたら、「子どもは親が笑わないと笑わないから、お父さんお母さんが今までと同じように接してあげてください」というアドバイスをいただいて。それで、できるだけ入院前のように接すると、だんだん声をやっとな出してようになってきたということがあったんですね。やっぱり、家族の存在というのがすごく子どものメンタルな部分でも大きいんだなというのに気付きました。

—— 一番近かった家族の間に物理的にも、心の距離もできてしまうということなんですね。

田村 そうですね。うちはそのとき兄弟はいなかったんですけど、とても仲の良い従兄弟がいて、その従兄弟は小さくて病室に入って来られないので、会えなくなってしまいました。自分が一番会いたい人に会えない環境っていうのを、このままにしておいていいのかというのは、当事者になって初めて気付いたことでした。

うちの子は2歳9カ月で発病して、約1年

でいろんな治療を受けて、一度「寛解」と言われる状況になりました。良くなったんです。幼稚園にも行き始めて。その後、小学校1年生で再発をしたんですけども、今度は2歳のときは違った悩みがでてきました。それは学校です。阪大病院はすごく院内学級が充実していて、うちの息子も楽しく授業を受けていたんですけども、やっぱり地元の学校の雰囲気とか、地元の学校の友達というのは、かけがえのないものなんだなというのをすごく実感しました。

友達の関係がブツッと切れちゃうんですね、入院すると。今まで毎日会って遊んでいたのに、自分だけ再発して入院して、元の学校にも行けない。2歳のときは家族が一番の社会だったけれども、今度は、もう社会が大きくなっている中での入院になってしまうんですね。その大きくなった社会がまたギュッと小さくなってしまふ。そこで苦しむというか、すごくつらいんだけど、どうしようもないということも分かる年齢になってきているので。だから、できるだけ状態のいいときは外泊をしたときにお友達に会わせていました。お友達のお母さんも学校もすごく理解があったので、環境にはすごく恵まれていました。

このあたりはすごく課題だなと思いますね。病院の中で笑っているのが100パーセントその子の笑顔じゃない。もちろん院内学級で笑うし、ボランティアさんの前でも笑うんだけど、実際の心の中では「お友達に会いたいな」とか「自分だけが取り残されているな」とか、そういう不安はすごく、年齢が上になるにしたがって大きくなるのかなという気がしますね。

そもそも病院の院内学級に入ってしまう

と、地元の学校から籍を抜かないといけません。在籍を。

—— 転校になるんですか。

田村 転校になるんです。そうすると朝の出席簿も呼ばれないし、机も椅子も下駄箱もなくなってしまふ。入院中にちょっと調子のいいときにのぞきに行ったとしても、自分の席はないとか、そういうかたちでショックを受けることもある。そのあたりを息子の学校の校長先生はよく分かってくださっていて、「いつでも戻ってこられるように」ということで、席もずっと置いてくれて、席替えのときもずっと一緒に席替えをしてくれて。お友達からは「今私の隣やから早く来てね」とかお手紙をもらって、というようなことをしてくださっていました。それはすごく嬉しかった。

結局、息子は8歳11カ月で亡くなったんですけども、そのときも、そのあとも、これは人によって「つらい」と言われるお母さんたちも多いと思うんですけど、お友達が来てくれて、ずっとつながってはいるんですね。私の場合は、やっぱり子どものことを知っている友達、しんどいときも知ってくれている友達がそばにいてというのは、すごく支えになっています。その子たちと結人(ゆうと)の話をしていると、私の知らない結人を知っていて、2年たった今でも「結人、こんなん言ってたで」とか言われたら、「ええ、そうなん？」みたいな感じで、新たな結人を今教えてもらったというのは、すごくグリーフケアになっていると思うんですね。このあたりはすごく個人差はあると思うんですけど。

「チャイルド・ケモ・ハウス」では、その子の発達年齢に応じた社会ということを大事にしていけないといけないと思います。何

歳のときは家族が一番だったり、何歳のときは、家族も大事だけど、それよりも友達に相談できたりとかっていうのがあると思うので。そのあたりは、できるだけその子に応じたこと、そして家族にも応じたことをしていきたいなと思います。

病院という概念自体をもう一度考えるきっかけになる

—— 最後になりますが、このプロジェクトは日本初ということですが、どんなインパクトを社会に与えるとお考えですか？

萩原 「チャイルド・ケモ・ハウス」のような施設は、「小児がんを診る者なら一度は考えることや」ということを、医療者の方から聞きました。

小児がんというのは、治療の副作用でよく感染しやすい状況になるんです。それなのに、例えばインフルエンザやノロウイルスたちも一緒に病棟で暮らすことになるので、それが伝染したら本末転倒な話で、そこで治療していること自体、親にとっては怖いことになっちゃうんですね。退院しても、通院をしばらくはしないといけなくて。その通院も、やっぱり抵抗力は低い状態のときにしなければならぬんだけど、普通に風邪をひいている子がいる待合いで待たなければいけないとか、すごくリスクを抱えた環境に置かれていると思います。そういう部分でいうと、小児がんを診る先生たちは、患者さんにリスクがある環境で診るしかないという気持ちをお持ちなので、このような施設があったらいいのにな、というふうに思われるらしいです。感染の面以外にも、家族と一緒に過ごせるという面がとても大きいと思いま

す。やっぱり24時間せまい空間に親がずっと詰めて生活をしていることのストレスなどを、現場にいるお医者さんはよく分かっている、それが改善されれば、複雑な問題も減ると思うんです。そのコンセプト的なところでの理解も、患者と医療者ともに共通してあると思います。そして、このプロジェクトは、完成したら小児がんの分野だけではなくて、医療界全体にある意味一石を投じることになると思うんです。病院という概念自体をもう一度考えるきっかけになるプロジェクトだと思います。大人の人でも入院経験がある方は、家族に自由に会えないとか、孫に会えないとか、そういう経験をされた方はいらっやと思うんですね。だから、小児がんの分野以外にも良い形で飛び火して広がってくれればと思っています。

—— 本日は、ありがとうございました。

TOOTH FAIRYと被災地支援

01 約120のTOOTH FAIRY参加歯科医院にお見舞いキットを送付

被災地にいらっしゃる約120のTOOTH FAIRY参加歯科医院の先生方に、口腔ケアや生活用品をお送りしました。

「たくさんの支援物資が、TOOTH FAIRYから届きました。ありがとうございます。岩手県では歯科医療チーム、口腔ケアチームが結成されています。岩手県歯科医師会と岩手県歯科衛生士会で作っているボランティアチームで、交代で毎日被災地に派遣されています。

5月21日(土)には、私が陸前高田市に口腔ケアチームとして参加します。その際には、TOOTH FAIRYからいただいた大切な支援物資を避難所に届けたいと思います。本当に心強い支援、ありがとうございました。」

熊谷歯科医院 熊谷先生より(岩手県一関市)

02 歯〜とどけるプロジェクト-被災者の口内環境を守る-

日本歯科医師会と協力し「歯〜とどけるプロジェクト」を実施。岩手、宮城、福島県の避難所に直接口腔ケアグッズをお届けしました。

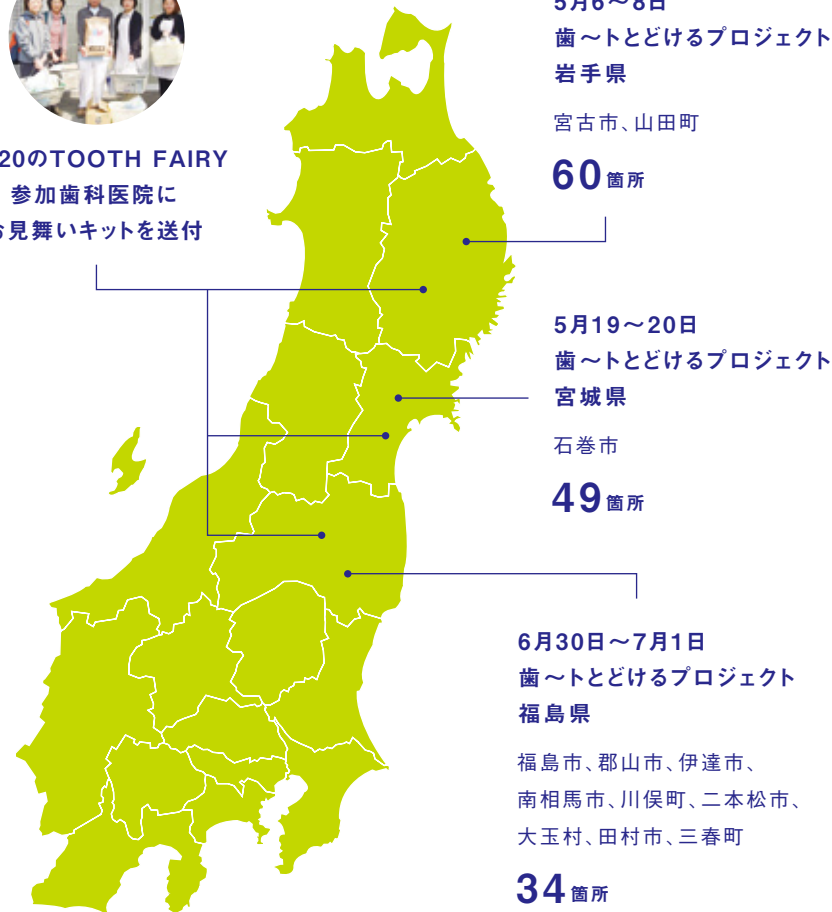
避難生活によるストレスにより、体の抵抗力が落ち、高齢者を中心に、虫歯、口内炎、歯周病が起こりやすく、特に怖いのが誤嚥性肺炎※です。こうした状況を回避するため、実際に避難所(一部仮設住宅)を訪れ、被災者の口腔ケアの状況を把握しながら、必要な物資を提供し、口腔ケアの講習も行いました。

※日本人の死亡原因の4位に肺炎がある。高齢者の肺炎は、誤嚥(口の中の唾液、たん、食べ物が気管の中に入り込むこと)によって、口の中の細菌が肺まで到達し炎症を引き起こすことが起因していることもある。

2011年3月11日に起きた未曾有の東日本大震災。TOOTH FAIRYにご参加いただいている多くの歯科医院も被災をされました。TOOTH FAIRYでも、微力ながら被災をされた歯科医院の皆様と避難所で避難をされていた方々に口腔ケアグッズをお届けしました。



約120のTOOTH FAIRY参加歯科医院にお見舞いキットを送付



日本歯科医師会の倉治常務理事、中村理事による被災時の口腔ケアについてのレクチャー

提供物資

歯ブラシ(大人用)、歯ブラシ(子ども用)、歯磨き剤(大人用)、歯磨き剤(子ども用)、手鏡、コップ、ガム、入れ歯洗浄剤、入れ歯洗浄袋、マウスウォッシュ、360度歯ブラシ、使い捨て口腔内洗浄用スポンジ、口腔内保湿剤

VOICE PAGE

TOOTH FAIRYへの声



歯科撤去金属だけでなく、使用しなくなったアクセサリも寄付の対象になります。

個人金属寄付の推移

2009年度	57件
2010年度	326件
2011年度	377件

協力企業 サンスター株式会社 ライオン株式会社

ご提供いただいた歯ブラシが子どもたちに届けられています。

学校を建設している、ミャンマーの山岳僻地には、歯科医院はもちろん、電気・ガス・水道すらありません。近隣の歯科医院と言っても、ボートと車を持ち継ぎ、6時間ほどかかり、経済的な状況からも現実的ではありません。子どもたちは、乳歯を中心にほぼ全員にむし歯が見られる状況で、事前の予防が欠かせません。しかしこうした地域では、歯ブラシすら家族に一本あればいい方です。今回、両社よりご提供いただいた歯ブラシ及びペーストは大切に子どもたちに届けています。ありがとうございました。



学校を建設しているミャンマーの山岳僻地の子どもたちに歯ブラシをご寄付いただきました。

寄付者の方からのメッセージ

個人の方から、温かいメッセージとともに金属をご寄付いただきました。

私は甘いものが好きで、小さい頃からむし歯になりやすく成長してから歯科医院に通院することが多く、とうとう金具付きのブリッジをする結果となりました。もったいないので保管しておいたのですが、少し傷んでいます。リサイクルできるか分かりませんが、お送りします。使わなくなったアクセサリもどうぞと書かれていたので、リングとネックレスをお送りします。日本初の小児がん専門施設ができればいいですね。(60代女性)

先日、歯の治療で要らなくなった金歯を他のアクセサリと共に換金しようと貴金属店に持って行ったところ歯は取り扱わないと言われました。そこでどこかで引き取ってほしいかなと思っていましたら、TOOTH FAIRYのことを知り「これだ!」と思いました。ほんの少しでも小児がんのおさんと家族の皆様にお役に立てるなら嬉しいです。日本初の小児がん専門施設ができますよう心からお祈り申し上げます。(70代男性)

祖母の入れ歯や被せ部分、金歯がたくさん遺品の中にありました。きっと祖母は喜ぶだろうと思い寄付させて頂くことに致しました。祖父は戦後すぐに脳腫瘍で亡くなり、その悔しさから伯父は脳外科医となりました。私の友人の息子さんは良性とはいえ脳の腫瘍で長年苦しみ、今もリハビリと症状の再発をいとめのため、大切な時間を奪われる日々です。家族の苦しみ大変さは、声をかけることが躊躇われる程のものです。わずかでもそうした困難に立ち向かう方々の助けになればと思います。(40代女性)

協力企業 有限会社 錦部製作所 インタビュー

社会貢献を考えることも、相手を思って製品を作ることも同じこと。

「寄付」とは一人の企業人として一人前になるためにも必要な行為ですし、社会の一員として生きていく上で当然なこと。従業員にとっても、社会にいいことをしている会社で勤めることで自信にもつながっていくのではないのでしょうか。私の弟は後天性の障害を持っています。病を抱える子を支える大変さは、親を見て痛いくらい分かっていました。難病に苦しむ子や支える家族が多くいることを分かっていたので、支援をしたいと思いました。小児ホスピスの完成は私自身も楽しみにしており、心も体も快適な時間を過ごせるようになってほしいと考えています。(代表取締役 錦部将教 様、錦部実敬 様)



超音波チップを寄付付き商品として販売いただき、2010年度より毎年ご寄付いただいています。

TOOTH FAIRYの活動が広がっています。
ご協力ありがとうございました。

メディア掲載実績&プレゼン・ブース展示等一覧

テレビ

01	2011.05.13	毎日放送 ちんぷいぷい	チャイルド・ケモ・ハウス 建設について
02	2012.01.23	TBS Nスタ	こどもホスピス建設資金 その鍵は‘歯’
03	2012.01.23	NHK NHKニュース	入れ歯や金歯の換金額 過去最多の見通し

新聞

01	2011.07.01	モーターボート選手新聞	小児ホスピスのシンボル・ツリーハウスが完成
02	2011.06.20	毎日新聞	ツリーハウスが完成
03	2011.10.27	日本経済新聞(夕刊)	金歯の価格が急上昇
04	2012.01.24	神戸新聞	小児がん患者ら支援へ 金歯回収で3.2億円
05	2012.01.24	室蘭民報	不要な金やプラチナ換金 小児医療施設建設へ
06	2012.01.24	長野日報	不要な金歯換金 福祉活動に寄付

その他メディア

01	2011.08.25	日歯広報	金・銀・パラなど約121kg引き渡し TOOTH FAIRYプロジェクト
02	2011.09.05	日歯広報	小児ホスピス「海のみえる森」を視察
03	2011.12.05	日歯広報	金・銀・パラなど約80kg引き渡し TOOTH FAIRYプロジェクト
04	2011.12.25	日歯広報	小児ホスピスとがん施設建設へ
05	2012.02.25	日歯広報	TOOTH FAIRYをCSR活動のモデルに
06	2012.03.05	日歯広報	被災地で分かった口腔ケアの重要性
07	2012.03.11	日本歯科評論3月号	回収した歯科撤去金属は152,967g 日本財団TOOTH FAIRYプロジェクト
08	2012.03.25	日歯広報	ミャンマーに建設した小学校を視察 TOOTH FAIRYプロジェクト

プレゼン・ブース展示等

01	2011.06.16	プレゼン	奈良県歯科医師会
02	2011.10.05	プレゼン	呉ブルーライオンズクラブ
03	2011.10.15	ブース展示	第64回九州歯科医学大会
04	2011.10.15	プレゼン	福岡歯科大学九州地区同窓会会議
05	2011.10.15	プレゼン	長崎大学歯学部同窓会
06	2012.02.25	プレゼン	第8回九州歯科大学・福岡歯科大学鹿児島支部合同研修会
07	2012.03.04	プレゼン	POIC研究会設立総会

参加登録医院 県別ランキングベスト10



2011年度参加登録医院数：616医院
累計：4,151医院(2012年3月末現在)



No.4 260 医院 神奈川県	No.5 198 医院 兵庫県	No.6 144 医院 北海道	No.7 143 医院 埼玉県	No.8 139 医院 長崎県	No.9 135 医院 福岡県	No.10 129 医院 千葉県
-------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------	-------------------------------

北海道	144	神奈川県	260	岐阜県	89	大阪府	305	鳥取県	18	熊本県	62
青森県	39	群馬県	59	静岡県	126	京都府	110	広島県	111	長崎県	139
岩手県	50	埼玉県	143	富山県	17	滋賀県	53	山口県	50	福岡県	135
宮城県	70	千葉県	129	長野県	85	奈良県	69	愛媛県	37	佐賀県	47
秋田県	27	東京都	372	新潟県	110	三重県	50	香川県	46	宮崎県	34
山形県	42	栃木県	74	福井県	21	和歌山県	75	徳島県	32	鹿児島県	70
福島県	52	山梨県	16	石川県	39	岡山県	52	高知県	31	沖縄県	15
茨城県	87	愛知県	307	兵庫県	198	島根県	19	大分県	35	累計	4151

参加歯科医師会
東海市歯科医師会(愛知県)
河内長野市歯科医師会(大阪府)
山県歯科医師会(岐阜県)
中京歯科医師会(京都府)
小城・多久歯科医師会(佐賀県)
伊都歯科医師会(和歌山県)

参加大学同窓会
福岡歯科大学同窓会長崎県支部
「歯ってん会」(長崎県)



収支報告 自2011年4月1日 至2012年3月31日

I. 収入の部	
歯科撤去金属売却収入	164,893,913 ※1
現金寄付収入	1,589,864 ※2
当期収入合計	166,483,777
前期繰越収支差額	116,166,426
収入の部合計	282,650,203
II. 支出の部	
事業費支出合計	0 ※3
分析精製手数料支出	4,282,977 ※4
当期支出合計	4,282,977
当期収支差額	162,200,800
次期繰越額	278,367,226

※1 売却金額(税込)から預かり消費税相当額を引いた額
※2 TOOTH FAIRY参加歯科医院や個人からの現金寄付
※3 2011年度は、着工予定だった「海のみえる森」の着工が遅れたため、建設費の支出はありませんでした。
※4 金属の分析精製手数料(税込)金額

換金結果 金属リサイクル結果

第6回換金	回収期間 2011年1月13日～8月3日
金額	59,502,406円※1
合計	553件(参加歯科医院/395件 個人/158件)
総重量	166,712g ※2
第7回換金	回収期間 2011年8月4日～11月24日
金額	31,493,132円※1
合計	483件(参加歯科医院/250件 個人/233件)
総重量	108,821g ※2(参加歯科医院/97,456g 個人/11,365g)
第8回換金	回収期間 2011年11月25日～2012年1月18日
金額	69,615,398円※1
合計	595件(参加歯科医院/563件 個人/32件)
総重量	210,414g ※2(参加歯科医院/208,258g 個人/2,156g)

※1 寄付金額 = 売却金額 - 分析手数料 - 預り消費税
※2 金属の総重量には、容器等の重量が含まれています。
また内容物の中にも換金できる有価金属以外の物質も含まれています。

TOOTH FAIRYプロジェクトからのご挨拶

全国展開への更なる協力と 益々の発展を祈念して

2009年6月に日本財団の主催、日本歯科医師会の協賛のもと始まった「TOOTH FAIRYプロジェクト」に、全国の多くの歯科医院にご参加いただいておりますことを心より感謝申し上げます。

平成24年3月末時点で4,151施設が参加され、この数は着実に増え、少しずつその輪は広がっておりますが、今後とも多くの参加を求めて努力を続けてまいります。

本プロジェクトは、患者さんのご理解のもと寄付を受けた歯科撤去物（貴金属）や、国民の皆様から寄せられた貴金属類をリサイクル業者に売却することにより得られた資金で、ミャンマーでの学校建設を行うとともに、全国初の試みとして、小児難病児と家族のためのレスパイト施設「海のみえる森」（神奈川県大磯町）や、小児がん専門施設「チャイルド・ケモ・ハウス（仮称）」（兵庫県神戸市）の建設を行っていき、極めて社会的有益性の高い事業を展開しております。これらの活動の根拠は、我々歯科医師が医療という社会的使命を果たすだけではなく、他の社会貢献活動をも実践していく必要があると信じているからです。

日本歯科医師会は、これからも「TOOTH FAIRYプロジェクト」への支援を積極的に行っていきたいと考えておりますので、何卒趣旨をご理解賜り、全国の歯科医院の更なるご参加をいただき、社会貢献活動の一翼を担っていただきますようお願い申し上げます。

社団法人日本歯科医師会
会長 大久保満男



公益財団法人日本財団
会長 笹川陽平



PROJECT STAFF紹介



長谷川 隆治（日本財団ファンドレイジングチーム）
「なぜ我がやらねばならぬ その訳は それに出会うも 気がつくも「才」」、この道歌は、社会貢献の本質を表していて、とても気に入っています。先生方の「才」により支えられているTOOTH FAIRYを、世界一のプロジェクトに出来るよう、来期も全力を尽くします。



田代 純一（日本財団ファンドレイジングチーム）
TOOTH FAIRYの新規開拓担当です！ 今後は日本とミャンマーの歯科医師が連携して、病院すら行けない子どもたちの歯の巡回診察をしようという話が進んでいます。ミャンマーの子どもたちと日本の子どもたち。子どもたちと歯科医師。お互いがより近い関係になるよう、お手伝いしたいと思います。



山崎 美加（日本財団ファンドレイジングチーム）
子どもの時の夢は「世界をとびまわる仕事につくこと」でした。ミャンマーに行き、外の世界を知らない子ども達に出会いました。日本では、命に限りがあり、夢を叶えられない子ども達に出会いました。子ども達が笑顔で過ごせる社会を歯科医師や患者の皆様と一緒に作ってまいります。



清水 亜寿歌（日本財団ファンドレイジングチーム）
学生時代にネパールへ行った際に、山肌が茶色いことにショックを受けました。自然豊かだと思っていたら、貧困な故に木を売ることによって生計を立てていると聞き・・・良き教育が国を動かす原点だと感じました。ミャンマーの子どもたちも日本の子どもたちも頑張れ～！！

世界に誇れる社会貢献活動 ～TOOTH FAIRY～

TOOTH FAIRYは、全国4,000を超える歯科医師の皆様にご協力いただき、金属の換金累計額は、3億2千万円を超えるまでになりました。2012年度は、日本初の小児ホスピス「海のみえる森」、同じく日本初の小児がん専門施設「チャイルド・ケモ・ハウス（仮称）」が、完成に向け動き出します。既存の社会構造の狭間で孤立してきた、難病で苦しむ子どもとその家族のために、大切に活用させていただきます。昨年3月11日の東日本大震災は、私たちが経験したことがない未曾有の大規模災害でした。全国の歯科医師の皆様が、ご遺体の身元確認という最も過酷で厳しい仕事をされたことに対し、改めて敬意を表したいと思います。震災後は、特に企業のCSR活動が盛んになり、私どものもとにも多くの企業が相談にこられました。しかし世界的に見れば、まだ日本の取り組みは遅れています。その中で、時代に一步先んじて、日本歯科医師会のような組織がTOOTH FAIRYに取り組んでいることは、世界的にも評価されるべきことです。

さらに言えば、一見、直接歯科とは関係のないミャンマーでの学校建設や国内の難病児の支援をしていることは、まさに自分たちの領域を超えた公益活動であると言えるでしょう。今後は、プロジェクトで支援する子どもたちの口腔ケアを行っていただく計画も進んでおり、重ねて深く感謝申し上げます。今後はより多くの歯科医師の皆様のご参加をお願いするとともに、私どもも全力を尽くしていきたいと考えています。今後とも、TOOTH FAIRYへのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

日本財団の 寄付プロジェクトご紹介



夢の貯金箱

一般の方々からのご寄付や贖罪寄付、香典返しに代わる寄付、遺贈寄付、全国で約1,350台設置されている寄付型「夢の自動販売機」からの寄付など、幅広い寄付者の方々の善意からプロジェクトを実施。「素晴らしい日本を次世代に」をミッションに犯罪被害者支援、ホームホスピス支援等を行っています。



Let's Tree

Let's Tree基金は韓国人俳優のイ・ソジンさんと日本財団によって立ち上げたチャリティー基金です。2011年度は、①日本初の小児ホスピス「海のみえる森」（神奈川県大磯町）にツリーハウスを建設、また②宮城県石巻市の仮設住宅団地「トゥモロー・ビジネスタウン」にて、地域のお年寄りや子どもたちと仮設住宅の壁に絵を描きました。



E-IL FOR JAPAN

「E-IL FOR JAPAN」は、日本オリンピック委員会（JOC）とともに東日本大震災復興とオリンピック日本代表を応援する寄付プロジェクトです。2012年3月より寄付金の募集を開始いたしました。皆様からお預かりした寄付金で、オリンピック選手と被災地の子どもたちの「ふれあい」をテーマにしたスポーツイベントなどを開催する予定です。

TOOTH FAIRYの流れ

TOOTH FAIRYは全国の歯科医師の皆様と患者様の協力により、歯科撤去金属をご寄付いただき、プロジェクトを進めています。歯科撤去金属以外にも、アクセサリ等の貴金属のご寄付も受け付けております。



歯科医師の皆様 TOOTH FAIRYに ご参加ください！



患者の皆様 TOOTH FAIRYに ご協力ください！



歯科撤去金属による社会貢献活動にご協力ください
TOOTH FAIRYは日本歯科医師会の協賛により日本財団が実施しています。



【お問い合わせ・お送り先】

☎ 0120-24-2471
✉ cc@ps.nippon-foundation.or.jp

〒107-8404 東京都港区赤坂1-2-2
日本財団 TOOTH FAIRY係（担当：長谷川、山崎）

TOOTH FAIRYのご参加はHPから TOOTH FAIRY

お気軽に
お問い合わせ
ください。



歯医者さんと患者さんで進める
社会貢献活動 TOOTH FAIRY
2011年度のご報告をお届けします



歯の妖精からの贈りもの

TOOTH
トウース フェアリー
FAIRY